



「新しい地球環境学」

西岡秀三編

古今書院, 2000年, 292頁,
3,500円 (本体価格)

地球温暖化やオゾン層破壊などの地球環境問題が世間の注目を浴びてから久しく時が流れた。大きく騒がれたリオの国連環境開発会議も1992年であり8年前になる。京都のCOP3でさえ1997年の3年前である。しかしながら、この1990年から始まる10年間は、日本の地球環境研究にとっては画期的な10年であった。このことは、編者のまえがきに「日本では1990年に科学技術会議が地球科学技術に関する研究開発計画基本計画を策定、同年環境庁は国連環境計画 (UNEP) のあげる地球環境問題分野に分けた、省庁横断的な地球環境研究総合推進計画による研究を開始した」とあるとおりである。このあたりの記述で驚くのは、このタイミングは、欧米の取り組みと比較しても遜色はないことである。また、資金的な面を考えても、欧米に比してそれほどの違いは無いように感じられる。ともすれば、「日本の地球環境問題に関する研究費は少ない」と思ってきたが、実情は違うのかも知れない。もう一度、謙虚に我々の研究環境を見つめなおす必要がある。

このような動きに伴い、この10年の間に進展した地球環境問題関連の研究の進展と展望が本書には要領良くまとめられている。その背景には、地球環境総合研究を推進する際に必要な今後の研究方向を展望する作業があった。その結果、筆者の多くは国立環境研の研究者とは言え、我が国の多くの研究者の意向を反映した結果となっている。

第1章は、「地球環境研究の全体図」と題され、問題解決型、自立分散ネットワーク型巨大科学、政策との連携など、地球環境研究の持つ特質が、筆者のこの10年の経験を踏まえて語られている。全体を概括するには大変便利な章となっている。続いて各論ということになり、第2章が「オゾン層破壊はなぜ止まらないか」、第3章が「温暖化予測の科学研究と我が国の取り組み」、第4章が「地球温暖化の影響予測評価に向けて」、第5章、「温暖化防止に向けてどう知恵を統合するか」、第6章、「酸性雨はどこからくるか?」、第7章「酸性雨問題」、第8章、「海洋汚染はどこまで進んでいるか」、第9章「熱帯林の保全に向けて」、第10章「生物多様性の保存はなぜ必要か」、第11章、「砂漠化防止に求められるもの」、第12章「地球環境は人間社会の問題ではないのか」、そして、最後に「衛星による大気環境観測に何を期待するか」(第13章)で締めている。

自分の関係している所の記述から判断すると、詳細な解説というよりは、大雑把な全体像を記述してあるように思われる。しかしながら、地球環境問題は多岐にわたり、自分の専門で無い分野の詳細な話を聞かされてもなかなか理解できないことが多い。その様な時に、簡単に要点を教えてもらおうと理解が進むことが多い。本書も、そのようにして地球環境問題全般の概括をするのに適していると言えよう。特に、地球環境問題に関する研究は、WCRP、IGBP、IHDPという3大国際プログラムで研究が行われている。更に、その中に様々なプロジェクトがあるので、外部の人からはその間の関係が非常にわかりづらい。そのようなプロジェクトなどの関係についても簡単にまとめているので参考になる。

(東京大学気候システム研究センター 住 明正)